曹洞宗勤行

○○寺

目次

開経偈／懺悔文／三帰礼文／三帰依文／三尊礼文
摩訶般若波羅蜜多心経／本尊上供回向文／四弘誓願文
大悲心陀羅尼／普門品偈／寿量品偈
仏垂般涅槃略説教誡経／消災呪／十句観音経
舎利礼文／甘露門／参同契／宝鏡三昧／修証義
普回向／在家略回向／普勧坐禅儀／食事の偈

開経偈（かいきょうげ）

無上甚深微妙法（むじょうじんじんみみょうほう）
百千万劫難遭遇（ひゃくせんまんごうなんそうぐう）
我今見聞得受持（がこんけんもんとくじゅじ）
願解如来真実義（がんげにょらいしんじつぎ）

懺悔文（さんげもん）

我昔所造諸悪業（がしゃくしょぞうしょあくごう）
皆由無始貪瞋癡（かいゆうむしとんじんち）
従身口意之所生（じゅうしんくいししょしょう）
一切我今皆懺悔（いっさいがこんかいさんげ）

三帰礼文（さんきらいもん）

自帰依仏（じーきえぶつ）　当願衆生（とうがんしゅじょう）　体解大道（たいげだいどう）　発無上意（ほつむじょうい）

自帰依法（じーきえほう）　当願衆生（とうがんしゅじょう）　深入経蔵（じんにゅうきょうぞう）　智慧如海（ちえにょかい）

自帰依僧（じーきえそう）　当願衆生（とうがんしゅじょう）　統理大衆（とうりだいしゅう）　一切無礙（いっさいむげ）

三帰依文（三帰戒文）

南無帰依仏　南無帰依法　南無帰依僧

帰依仏無上尊　帰依法離塵尊　帰依僧和合尊

帰依仏竟　帰依法竟　帰依僧竟

三尊礼文（さんぞんらいもん）

南無大恩教主本師釈迦牟尼仏（なむだいおんきょうしゅほんししゃかむにぶつ）
南無高祖承陽大師（なむこうそじょうようだいし）
南無太祖常済大師（なむたいそじょうさいだいし）
南無大慈大悲哀愍摂受（なむだいずだいひあいみんしょうじゅ）
生生世世値遇頂戴（しょうしょうせせちぐうちょうだい）

摩訶般若波羅蜜多心経

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。
度一切苦厄。舎利子。色不異空。空不異色。色即是
空。空即是色。受想行識。亦復如是。舎利子。是諸
法空相。不生不滅。不垢不浄。不増不減。是故空
中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味
触法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明尽。乃

至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顚倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多。是大神呪是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。真実不虚。故説般若波羅蜜多呪。即説呪曰。羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。般若心経。

本尊上供回向文

上来、摩訶般若波羅蜜多心経を諷誦する功徳は、大恩教主本師釈迦牟尼仏、高祖承陽大師、太祖常済大師に供養し奉り、無上仏果菩提を荘厳す。伏して願わくは四恩総て報じ、三有斉しく資け、法界の有情と、同じく種智を円かにせんことを。

冀う所は、家門繁栄、子孫長久、災障消除、諸縁吉祥ならんことを。

十方三世一切仏
諸尊菩薩摩訶薩
摩訶般若波羅密

［略三宝］

四弘誓願文（しぐせいがんもん）

衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）
煩悩無尽誓願断（ぼんのうむじんせいがんだん）
法門無量誓願学（ほうもんむりょうせいがんがく）
仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）

大悲心陀羅尼（大悲呪）

南無喝囉怛那。哆囉夜耶。南無阿唎耶。婆盧羯帝爍
盋囉耶。菩提薩哆婆耶。摩訶薩哆婆耶。摩訶迦嚧尼
迦耶。唵。薩皤囉罰曳数怛那怛写。南無悉吉栗埵伊
蒙。阿唎耶。婆盧吉帝。室仏囉。楞駄婆。南無那
囉。謹墀醯唎。摩訶皤哆。沙咩薩婆。阿他豆輸朋。
阿遊孕。薩婆薩哆。那摩婆伽。摩罰特豆。怛姪他。
唵。阿婆盧醯。盧迦帝。迦羅帝。夷醯唎摩訶。菩提

薩埵。薩婆薩婆。摩囉摩囉。摩醯摩醯。唎駄孕俱盧
俱盧。羯蒙度盧度盧。罰闍耶帝。摩訶罰闍耶帝。陀
囉陀囉。地唎尼。室仏囉耶。遮囉遮囉。麽麽罰摩
囉。穆帝隷。伊醯伊醯。室那室那。阿囉嗲仏囉舎
利。罰沙罰嗲。仏囉舎耶。呼盧呼盧。摩囉呼盧呼
盧。醯唎婆囉婆囉。悉唎悉唎。蘇嚧蘇嚧。菩提夜。
菩提夜。菩駄夜菩駄夜。弥帝唎夜。那囉謹墀。地唎
瑟尼那。婆夜摩那。婆婆訶。悉陀夜。婆婆訶。摩訶
悉陀夜。婆婆訶。悉陀喩芸。室皤囉耶。婆婆訶。那

囉謹墀。娑婆訶。摩囉那囉娑婆訶。悉囉僧阿穆佉耶。娑婆訶。娑婆摩訶悉陀夜。娑婆訶。者吉囉阿悉陀夜。娑婆訶。波哆摩羯悉哆夜。娑婆訶。那羅謹墀皤伽羅耶。娑婆訶。摩婆利勝羯羅耶娑婆訶。南無喝囉怛那哆囉耶夜。南無阿唎耶。婆盧吉帝。爍皤囉夜。娑婆訶。悉殿都漫多囉。跋陀耶。娑婆訶。

普門品偈

世尊妙相具　我今重問彼
せーそんみょうそうぐー　がーこんじゅうもんぴー

具足妙相尊　偈答無尽意
ぐーそくみょうそうそん　げーとうむーじんにー

弘誓深如海　歴劫不思議
ぐーぜいじんにょーかい　りゃっこうふーしーぎー

我為汝略説　聞名及見身
がーいーにょーりゃくせつ　もんみょうぎゅうけんしん

仮使興害意　推落大火坑
けーしーこうがいいー　すいらくだいかーきょう

或漂流巨海　竜魚諸鬼難
わくひょうるーこーかい　りゅうぎょーしょーきーなん

或在須弥峰　為人所推堕
わくざいしゅーみーぶー　いーにんしょーすいだー

仏子何因縁　汝聴観音行
ぶっしーがーいんねん　にょーちょうかんのんぎょう

侍多千億仏　心念不空過
じーたーせんのくぶつ　しんねんふーくうかー

念彼観音力　念彼観音力
ねんぴーかんのんりき　ねんぴーかんのんりき

念彼観音力　名為観世音
ねんぴーかんのんりき　みょういーかんぜーおん

善応諸方所　発大清浄願
ぜんのうしょーほうしょー　ほっだいしょうじょうがん

能滅諸有苦　火坑変成池
のうめっしょうーくー　かーきょうへんじょうちー

波浪不能没　如日虚空住
はーろうふーのうもつ　にょーにちこーくうじゅう

或被悪人逐
わくひーあくにんちく
或値怨賊繞
わくちーおんぞくにょう
或遭王難苦
わくそうおうなんくー
或囚禁枷鎖
わくしゅうきんかーさー
呪詛諸毒薬
しゅーそーしょーどくやく
或遇悪羅刹
わくぐうあくらーせつ
若悪獣囲繞
にゃくあくじゅういーにょう
蚖蛇及蝮蠍
がんじゃぎゅうぶっかつ
雲雷鼓掣電
うんらいくーせいでん

堕落金剛山
だーらくこんごうせん
各執刀加害
かくしゅうとうかーがい
臨刑欲寿終
りんぎょうよくじゅーしゅう
手足被枷械
しゅーそくひーちゅうかい
所欲害身者
しょーよくがいしんしゃー
毒竜諸鬼等
どくりゅうしょーきーとう
利牙爪可怖
りーげーそうかーふー
気毒煙火燃
けーどくえんかーねん
降雹澍大雨
ごうばくじゅーだいうー

念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき
念彼観音力
ねんぴーかんのんりき

不能損一毛
ふーのうそんいちもう
咸即起慈心
げんそくきーじーしん
刀尋段段壊
とうじんだんだんえー
釈然得解脱
しゃくねんとくげーだつ
還著於本人
げんじゃくおーほんにん
時悉不敢害
じーしっぷーかんがい
疾走無辺方
しっそうむーへんぽう
尋声自回去
じんしょうじーえーこー
応時得消散
おうじーとくしょうさん

衆生被困厄　無量苦逼身　観音妙智力　能救世間苦
しゅーじょうひーこんやく　むーりょうくーひっしん　かんのんみょうちーりき　のうぐーせーけんくー

具足神通力　広修智方便　十方諸国土　無刹不現身
ぐーそくじんずうりき　こうしゅーちーほうべん　じっぽうしょーこくどー　むーせっふーげんしん

種種諸悪趣　地獄鬼畜生　生老病死苦　以漸悉令滅
しゅーじゅーしょーあくしゅー　じーごくきーちくしょう　しょうろうびょうしーくー　いーぜんしつりょうめつ

真観清浄観　広大智慧観　悲観及慈観　常願常瞻仰
しんかんしょうじょうかん　こうだいちーえーかん　ひーかんぎゅうじーかん　じょうがんじょうせんごう

無垢清浄光　慧日破諸闇　能伏災風火　普明照世間
むーくーしょうじょうこう　えーにちはーしょーあん　のうぶくさいふうかー　ふーみょうしょうせーけん

悲体戒雷震　慈意妙大雲　澍甘露法雨　滅除煩悩燄
ひーたいかいらいしん　じーいーみょうだいうん　じゅーかんろーほうー　めつじょーぼんのうえん

諍訟経官処　怖畏軍陣中　念彼観音力　衆怨悉退散
じょうしょうきょうかんしょー　ふーいーぐんじんちゅう　ねんぴーかんのんりき　しゅーおんしったいさん

妙音観世音　梵音海潮音　勝彼世間音　是故須常念
みょうおんかんぜーおん　ぼんのんかいちょうおん　しょうひーせーけんのん　ぜーこーしゅーじょうねん

念念勿生疑　観世音浄聖　於苦悩死厄　能為作依怙
ねんねんもっしょうぎー　かんぜーおんじょうしょう　おーくーのうしーやく　のういーさーえーこー

具一切功徳　慈眼視衆生　福聚海無量　是故応頂礼
爾時。持地菩薩。即従座起。前白仏言。世尊。若有
衆生。聞是観世音菩薩品。自在之業。普門示現。神
通力者。当知是人。功徳不少。仏説是普門品時。衆
中八万四千衆生。皆発無等等阿耨多羅三藐三菩提
心。

寿量品偈

自我得仏来　所経諸劫数　無量百千万　億載阿僧祇
常説法教化　無数億衆生　令入於仏道　爾来無量劫
為度衆生故　方便現涅槃　而実不滅度　常住此説法
我常住於此　以諸神通力　令顛倒衆生　雖近而不見
衆見我滅度　広供養舎利　咸皆懐恋慕　而生渇仰心
衆生既信伏　質直意柔軟　一心欲見仏　不自惜身命
時我及衆僧　俱出霊鷲山　我時語衆生　常在此不滅
以方便力故　現有滅不滅　余国有衆生　恭敬信楽者

我復於彼中　為説無上法　汝等不聞此　但謂我滅度
がーぶーおーひーちゅう　いーせつむーじょうほう　にょーとうふーもんしー　たんにーがーめっどー

我見諸衆生　没在於苦海　故不為現身　令其生渇仰
がーけんしょーしゅーじょう　もつざいおーくーかい　こーふーいーげんしん　りょうごーしょうかつごう

因其心恋慕　乃出為説法　神通力如是　於阿僧祇劫
いんごーしんれんぼー　ないしゅついーせっぽう　じんずうりきにょーぜー　おーあーそうぎーこう

常在霊鷲山　及余諸住処　衆生見劫尽　大火所焼時
じょうざいりょうじゅーせん　ぎゅうよーしょーじゅうしょー　しゅーじょうけんこうじん　だいかーしょーしょうじー

我此土安穏　天人常充満　園林諸堂閣　種種宝荘厳
がーしーどーあんのん　てんにんじょうじゅうまん　おんりんしょーどうかく　しゅーじゅーほうしょうごん

宝樹多華果　衆生所游楽　諸天撃天鼓　常作衆伎楽
ほうじゅたーけーかー　しゅーじょうしょーゆうらく　しょーてんきゃくてんくー　じょうさーしゅーぎーがく

雨曼陀羅華　散仏及大衆　我浄土不毀　而衆見焼尽
うーまんだーらーけー　さんぶつぎゅうだいしゅー　がーじょうどーふーきー　にーしゅーけんしょうじん

憂怖諸苦悩　如是悉充満　是諸罪衆生　以悪業因縁
うーふーしょーくーのう　にょーぜーしつじゅうまん　ぜーしょーざいしゅーじょう　いーあくごういんねん

過阿僧祇劫　不聞三宝名　諸有修功徳　柔和質直者
かーあーそうぎーこう　ふーもんさんぼうみょう　しょーうーしゅーくーどく　にゅうわーしつじきしゃー

則皆見我身
久乃見仏者
寿命無数劫
当断令永尽
実在而言死
為凡夫顛倒
放逸著五欲
随応所可度
得入無上道

在此而説法
為説仏難値
久修業所得
仏語実不虚
無能説虚妄
実在而言滅
堕於悪道中
為説種種法
速成就仏身

或時為此衆
我智力如是
汝等有智者
如医善方便
我亦為世父
以常見我故
我常知衆生
毎自作是念

説仏寿無量
慧光照無量
勿於此生疑
為治狂子故
救諸苦患者
而生憍恣心
行道不行道
以何令衆生

仏垂般涅槃略説教誡経

釈迦牟尼仏、初に法輪を転じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう。応に度すべき所の者は、皆已に度し訖って、娑羅双樹の間に於て、将に涅槃に入りたまわんとす。是の時中夜寂然として声無し、諸の弟子の為めに略して法要を説きたもう。

汝等比丘、我が滅後に於て、当に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如

し。当に知るべし、此れは即ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此れに異なること無けん。浄戒を持たん者は、販売貿易し、田宅を安置し、人民奴婢畜生を畜養することを得ざれ。一切の種植及び諸の財宝、皆当に遠離すること火坑を避るが如くすべし。草木を斬伐し、土を墾し地を掘り、湯薬を合和し、吉凶を占相し、星宿を仰観し、盈虚を推歩し、暦数算計することを得ざれ、皆応ぜざる所なり。身を節し時に食して、清浄にして自活せ

よ。世事に参預し、使命を通知し、呪術し、仙薬し、好みを貴人に結び、親厚媟慢することを得ざれ、皆作に応ぜず。当に自ら端心正念にして度を求むべし。瑕疵を包蔵し、異を顕し衆を惑わすことを得ざれ、四供養に於て量を知り足ることを知るべし。趣に供事を得て、蓄積す応らず。此れ即ち略して持戒の相を説く。戒は是れ正順解脱の本なり、故に波羅提木叉と名づく。此の戒に依因すれば、諸の禅定及び滅苦の智慧を生ずることを得。是の故

に比丘当に浄戒を持って、毀欠せしむること勿るべし。若し人能く浄戒を持すれば、是れ則ち能く善法あり。若し浄戒無ければ、諸善の功徳皆生ずることを得ず。是れを以て当に知るべし、戒は第一安穏功徳の所住処たることを。

汝等比丘、已に能く戒に住す。当に五根を制すべし、放逸にして五欲に入らしむること勿れ。譬えば牧午の人の杖を執って、之を視せしめて、縦逸にして人の苗稼を犯さしめざるが如し。若し五根を縦

にすれば、唯五欲の将に涯畔無して制す可らざるのみにあらず。亦た悪馬の轡を以て制せざれば、将当に人を牽いて、坑陥に墜さんとするが如し。劫害を被むるが如きんば、苦一世に止まる。五根の賊は禍殃累世に及ぶ、害たること甚だ重し、慎まずんばあるべからず。是の故に智者は制して而も随わず。之を持すること賊の如くにして、縦逸ならしめざれ。仮令之を縦にするとも、皆亦た久しからずして其の磨滅を見ん。此の五根は心を其の主と為す。是の故

に汝等当に好く心を制すべし。心の畏るべきこと毒蛇、悪獣、怨賊よりも甚だし。大火の越逸なるも、未だ喩とするに足らず。譬えば人あって手に密器を執って、動転軽躁して、但だ蜜のみを観て、深坑を見ざるが如し。又た狂象の鉤なく、猿猴の樹を得て騰躍踔躑して、禁制すべきこと難きが如し。当に急に之を挫いて、放逸ならしむること無かるべし。此の心を縦にすれば、人の善事を喪う。之を一処に制すれば、事として弁ぜずということ無し。是の故に

比丘当に勤めて精進して、汝が心を折伏すべし。汝等比丘、諸の飲食を受けては、当に薬を服するが如くすべし。好きに於ても、悪きに於ても、増減を生ずること勿れ。趣に身を支うることを得て以て飢渇を除け。蜂の華を採るに、但だ其の味いのみを取て、色香を損せざるが如し。比丘も亦た爾なり、人の供養を受けて趣に自ら悩を除け、多く求めて其の善心を壊することを得ること無れ。譬えば智者の牛力を堪うる所の多少を籌量して、分に過して以て、

其の力を竭さしめざるが如し。

汝等比丘、昼は則ち勤心に善法を修習して、時を失せしむること無れ。初夜にも後夜にも亦た廃すること有ること勿れ。中夜に誦経して以て自ら消息せよ。睡眠の因縁を以て一生空しく過して所得なからしむること無れ。当に無常の火の諸の世間を焼くことを念じて、早く自度を求むべし。睡眠すること勿れ、諸の煩悩の賊、常に伺って人を殺すこと、怨家よりも甚だし。安んぞ睡眠して自ら警寤せざる可け

んや。煩悩の毒蛇、眠って汝が心に在り、譬ば黒蚖の汝が室に在て眠るが如し。当に持戒の鉤を以て早く之を屏除すべし。睡蛇既に出でなば乃ち安眠すべし。出でざるに而も眠るは是れ無慙の人なり。慙恥の服は諸の荘厳に於て最も第一なりとす。慙は鉄鉤の如く、能く人の非法を制す。是の故に比丘常に当に慙恥すべし、暫くも替つることを得ること勿れ。若し慙恥を離すれば、則ち諸の功徳を失す。有愧の人は則ち善法あり。若し無愧の者は諸の禽獣と相異

なること無けん。

汝等比丘、若し人あり来って節節に支解するとも、当に自ら心を摂めて瞋恨せしむること無かるべし。亦た当に口を護るべし、悪言を出すこと勿れ。若し恚心を縦にすれば、則ち自ら道を妨げ、功徳の利を失す。忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能わざる所なり。能く忍を行ずる者は、乃ち名づけて有力の大人と為すべし。若し其れ悪罵の毒を歓喜し忍受して、甘露を飲むが如くすること能わざるものは、入

道智慧の人と名づけず。所以は何んとなれば、瞋恚の害は、則ち、諸の善法を破り、好名聞を壊す、今世後世の人、見んことを喜わず。当に知るべし、瞋心は猛火よりも甚だし。常に当に防護して、入ることを得せしむること勿るべし。功徳を劫むるの賊は瞋恚に過ぎたるは無し。白衣受欲非行動の人、法として自ら制すること無きすら、瞋猶お恕むべし。出家行道無欲の人にして、而も瞋恚を懐けるは甚だ不可なり。譬えば清涼の雲の中に霹靂火を起すは、所

応に非ざるが如し。

汝等比丘、当に自ら頭を摩づべし。已に飾好を捨てて、壊色の衣を着し、応器を執持して、乞を以て自活す、自見是の如し。若し憍慢起らば、当に疾く之を滅すべし。憍慢を増長するは、尚お世俗白衣の宜しき所に非ず。何に況んや出家入道の人、解脱の為めの故に、自ら其の身を降して而も乞を行ずるをや。汝等比丘、諂曲の心は道と相違す。是の故に宜しく応に其の心を質直にすべし。当に知るべし、諂曲は

但だ欺誑を為すことを。入道の人は則ち是の処なし。是の故に汝等宜しく応に端心にして質直を以て本と為すべし。

汝等比丘、当に知るべし、多欲の人は利を求むること多きが故に苦悩も亦た多し。少欲の人は無求無欲なれば則ち此の患無し、直爾に少欲すら尚お応に修習すべし。何に況んや、少欲の能く諸の功徳を生ずるをや。少欲の人は則ち諂曲して以て人の意を求むること無し。亦復諸根の為めに牽れず。少欲を行ず

る者は、心則ち坦然として憂畏する所無し。事に触れて余り有り、常に足らざること無し。少欲ある者は則ち涅槃あり。是れを少欲と名づく。

汝等比丘、若し諸の苦悩を脱せんと欲せば、当に知足を観ずべし。知足の法は即ち是れ富楽安穏の処なり。知足の人は地上に臥すと雖も、猶お安楽なりとす。不知足の者は、天堂に処すと雖も亦た意に称わず。不知足の者は富めりと雖も、而も貧しし。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五

欲の為めに牽かれて。知足の者の為めに憐愍せらる。是れを知足と名づく。

汝等比丘、寂静無為の安楽を求めんと欲せば、当に憒鬧を離れて独処に閑居すべし。静処の人は、帝釈諸天の共に敬重する所なり。是の故に当に己衆他衆を捨てて、空閑に独処して、滅苦の本を思うべし。

若し衆を楽う者は則ち衆悩を受く、譬えば大樹の衆鳥之に集まれば、則ち枯折の患あるが如し。世間の縛著は衆苦に没す。譬えば老象の泥に溺れて、自ら

出づること能わざるが如し。是れを遠離と名づく。汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難き者なし。是の故に汝等当に勤めて精進すべし。譬えば少水の常に流れて、則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心数々懈廃すれば、譬えば火を鑽るに未だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖も、火を得べきこと難きが如し。是れを精進と名づく。

汝等比丘、善知識を求め善護助を求むることは、不

忘念に如くは無し。若し不忘念ある者は、諸の煩悩の賊、則ち入ること能わず。是の故に汝等常に当に念を摂めて心に在くべし。若し念を失する者は則ち諸の功徳を失す。若し念力堅強なれば、五欲の賊の中に入ると雖も、為めに害せられず。譬えば鎧を著て陣に入れば、則ち畏るる所なきが如し。是れを不忘念と名づく。

汝等比丘、若し念を摂むる者は心則ち定に在り。心定に在るが故に能く世間生滅の法相を知る。是の故

に汝等常に当に精進して、諸の定を修習すべし。若し定を得る者は心則ち散ぜず。譬えば水を惜める家の、善く提塘を治するが如し。行者も亦た爾なり、智慧の水の為めの故に、善く禅定を修して漏失せざらしむ。是れを名づけて定と為す。

汝等比丘、若し智慧あれば則ち貪著なし。常に自ら省察して失あらしめざれ。是れ則ち我が法中に於て能く解脱を得。若し爾らざる者は、既に道人に非ず、又た白衣に非ず、名づくる所なし。実智慧の者

は、則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり、亦た是れ無明黒暗の大明灯なり、一切病者の良薬なり、煩悩の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等、当に聞思修の慧を以て、而も自ら増益すべし。若し人智慧の照あれば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見の人なり。是れを智慧と名づく。

汝等比丘、若し種種の戯論は其の心則ち乱る。復た出家すと雖も、猶お未だ得脱せず。是の故に比丘当に急に乱心戯論を捨離すべし。若し汝寂滅の楽を得

んと欲せば、唯当に善く戯論の患を滅すべし。是れを不戯論と名づく。

汝等比丘、諸の功徳に於て、常に当に一心に諸の放逸を捨つること怨賊を離するが如くすべし。大悲世尊所説の利益は、皆已に究竟す。汝等但だ将に勤めて之を行ずべし。若しは山間、若しは空沢の中に於ても、若しは樹下、閑処、静室に在っても、所受の法を念じて忘失せしむること勿れ。常に当に自ら勉めて精進して之を修すべし。為すこと無うして空し

く死せば、後に悔あることを致さん。我れは良医の病を知て薬を説くが如し、服すと服せざるとは医の咎に非らず。又た善く導くものの、人を善道に導くが如し、之を聞いて行かざるは、導くものの過に非らず。

汝等比丘、若し苦等の四諦に於て疑う所ある者は、疾く之を問うべし。疑を懐いて決を求めざること得ること無かれ。爾の時に、世尊、是くの如く三たび唱えたもうに、人問いたてまつる者なし。所以は何

んとなれば、衆疑い無きが故に。

時に阿嵬楼駄、衆の心を観察して、而も仏に白して言さく、世尊、月は熱からしむべく、日は冷かならしむべくとも、仏の説きたもう四諦は、異ならしむべからず。仏の説きたもう苦諦は、実に苦なり、楽ならしむべからず。集は真に是れ因なり、更に異因なし。苦若し滅すれば即ち是れ因滅す、因滅するが故に果滅す。滅苦の道は実に是れ真道なり、更に余道なし。世尊、是の諸の比丘、四諦の中に於て決定

して疑い無し。

此の衆中に於て若し所作未だ弁ぜざる者あらば、仏の滅度を見て当に悲感あるべし。若し初めて法に入る者あれば、仏の所説を聞いて即ち皆得度す。譬えば夜電光を見て、即ち道を見ることを得るが如し。若し所作已に弁じ已に苦海を度る者は但だ是の念を作すべし、世尊の滅度一に何ぞ疾なる哉と。

阿耆楼駄、此の語を説いて、衆中皆悉く四聖諦の義を了達すと雖も、世尊此の諸の大衆をして皆堅固な

ることを得せしめんと欲して、大悲心を以て復た衆の為めに説きたもう。

汝等比丘、悲悩を懐くこと勿れ。若し我れ世に住すること一劫するとも、会うものは亦た当に滅すべし。会うて而も離れざること終に得べからず。自利利人の法は皆具足す。若し我れ久しく住するとも更に所益なけん。応に度すべき者は、若しは天上人間皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者には、皆亦た已に得度の因縁を作す。自今已後、我が諸の弟子、

展転して之を行ぜば、即ち是れ如来の法身常に在して而も滅せざるなり。是の故に当に知るべし、世は皆無常なり、会うものは必らず離るることあり。憂悩を懐くこと勿れ、世相是の如し。当に勤めて精進して早く解脱を求め、智慧の明を以て、諸の痴暗を滅すべし。世は実に危脆なり、牢強なる者なし。我れ今滅を得ること悪病を除くが如し。此れは是れ応に捨つべき罪悪のものなり。仮に名づけて身と為す、老病生死の大海に没在せり。何ぞ智者は之を除

滅することを得ること、怨賊を殺すが如くにして、而も歓喜せざること有らんや。

汝等比丘、常に当に一心に出道を勤求すべし。一切世間の動不動の法は、皆是れ敗壊不安の相なり。

汝等且く止みね、復た語いうこと得ること勿れ。時将に過ぎなんと欲す、我れ滅度せんと欲す。是れ我が最後の教誨する所なり。

消災呪（しょうさいしゅう）

曩謨三滿哆（のーもーさんまんだー）。母馱喃（もとなん）。阿盎囉底賀多舎（おはらーちいことしゃー）。娑曩喃怛姪（そのなんとうじー）他（とう）。唵（えん）。佉佉（ぎゃーぎゃー）。佉呬佉呬（ぎゃーきーぎゃーきー）。吽吽（うんぬん）。入嚩囉入嚩囉（しふらーしふらー）。盎（は）囉入嚩囉盎囉入嚩囉（らしふらーはらしふらー）。底瑟（ちしゅさー）底瑟（ちしゅさー）。致瑟（ちしゅ）哩（りー）致瑟（ちしゅ）哩（りー）。娑発吒（そわじゃー）娑発吒（そわじゃー）。扇底迦（せんちーぎゃー）。室哩（しりー）曳（えいそー）娑婆訶（もーこー）。

十句観音経（じっくかんのんぎょう）

観世音（かんぜーおん）　南無仏（なーむーぶつ）
与仏有因（よーぶつうーいん）　与仏有縁（よーぶつうーえん）
仏法僧縁（ぶっぽうそうえん）　常楽我浄（じょうらくがーじょう）
朝念観世音（ちょうねんかんぜーおん）　暮念観世音（ぼーねんかんぜーおん）
念念従心起（ねんねんじゅうしんきー）　念念不離心（ねんねんふーりーしん）

舎利礼文

一心頂礼　万徳円満　釈迦如来　真身舎利
本地法身　法界塔婆　我等礼敬　為我現身
入我我入　仏加持故　我証菩提　以仏神力
利益衆生　発菩提心　修菩薩行　同入円寂
平等大智　今将頂礼

甘露門

◇奉請三宝

南無十方仏。南無十方法。南無十方僧。

南無本師釈迦牟尼仏。

南無大慈大悲救苦観世音菩薩。

南無啓教阿難尊者。

◇招請発願

是諸衆等、発心して一器の浄食を奉持して、普く十

方、窮尽虚空、周遍法界、微塵刹中、所有国土の一切の餓鬼に施す、先亡久遠、山川地主、乃至曠野の諸鬼神等、請う来って此に集まれ、我今悲愍して、普く汝に食を施す、願くは汝各各、我此食を受けて、転じ持って尽虚空海の諸仏及聖、一切の有情に供養して、汝と有情と、普く皆飽満せんことを、亦願くは汝が身、此の咒食に乗じて、苦を離れて解脱し、天に生じて楽を受け、十方の浄土も、意に随って遊往し、菩提心を発し、菩提道を行じ、当来に作仏して、

永く退転なく、前に道を得る者は、誓て相度脱せんことを、又願くは汝等、昼夜恒常に、我を擁護して、我所願を満ぜんことを、願くは此食を施す、所生の功徳、普く以て法界の有情に廻施して、諸の有情と、平等共有ならん、諸の有情と共に、同じく此福を以て、悉く将て真如法界、無上菩提、一切智智に回向して、願くは速に成仏して、余果を招くこと勿らん。法界の含識願くは此法に乗じて、疾く成仏することを得ん。

◇雲集鬼神招請陀羅尼

曩謨　歩布哩　迦哩多哩　怛他孽多也

◇破地獄門開咽喉陀羅尼

唵歩布帝哩　迦多哩　怛他孽多也

◇無量威徳自在光明加持飲食陀羅尼

曩莫　薩嚩　怛他孽多　嚩嚕吉帝　唵　三婆羅　三

婆羅吽

◇蒙甘露法味陀羅尼

曩莫　蘇嚕頗也　怛佗孽多也　怛儞也佗

唵　蘇嚕蘇嚕　鉢羅蘇嚕　鉢羅蘇嚕　娑婆賀

◇毘盧舎那一字心水輪観陀羅尼

曩莫　三満多　没馱南鑁

◇五如来宝号招請陀羅尼

南無多宝如来　曩謨　薄伽筏帝　鉢囉歩多

阿囉怛曩也　怛他孽多也　徐慳貪業福智円満

南無妙色身如来　曩謨　薄伽筏帝　蘇嚕波耶　怛佗

孽多也　破醜陋形円満相好

南無甘露王如来　曩謨　薄伽筏帝　阿蜜嗏帝　阿囉

惹耶　怛他孽他也　灌法身心令受快楽

南無広博身如来　曩謨　婆伽筏帝　尾布邏孽　怛囉

耶　怛佗孽多也　咽喉広大飲食充飽

南無離怖畏如来　曩謨　婆伽筏帝　阿婆演迦羅

耶　怛佗孽多耶　恐怖悉除離餓鬼趣

◇発菩提心陀羅尼

唵　冒地即多　母怛　波多野迷

◇授菩薩三摩耶戒陀羅尼

唵　三昧耶　薩怛鑁

◇大宝楼閣善住秘密根本陀羅尼

曩莫　薩嚩怛他孽多南　唵　尾補羅　孽羅陛　摩麼
鉢羅陛　怛佗多儞捺捨寧　摩抳麼抳　蘇鉢囉陛　尾
麼黎娑孽囉　儼鼻嚩　吽吽入嚩囉入嚩囉　没馱　尾
盧枳帝　麌四夜　智瑟耻多孽囉陛　娑嚩訶　唵麼抳
嚩日哩吽　唵麼抳馱哩　吽泮吒

◇諸仏光明真言灌頂陀羅尼

唵阿暮伽　廃嚕者娜　摩訶畝捺囉　麼抳鉢頭麼
入嚩囉跛囉韈利　譚野吽

◇回向偈（えこうげ）

以此修行衆善根（いーすーしゅうあんしゅうせんげん）　報答父母劬労徳（ほうとうぶーもー　きーろうてー）　存者福楽寿無窮（そんしゃーふーらーじゅむーきゅー）

亡者離苦生安養（もうしゃりーくーさんなんよう）　四恩三有諸含識（すーいんさんゆうしーあんしー）　三途八難苦衆生（さんずーはーなんくーしゅうさん）

倶蒙悔過洗瑕疵（きゅーもうくいこーせんなんすー）　尽出輪回生浄土（じんしゅーりんぬいさんじんずー）

参同契

竺土大仙の心、東西密に相附す、人根に利鈍あり、道に南北の祖なし

霊源明に皓潔たり、支派暗に流注す、事を執するも元これ迷い、理に契うも亦悟にあらず

門門一切の境、回互と不回互と、回してさらに相渉る、しからざれば位によって住す

色もと質像を殊にし声もと楽苦を異にす、暗は上中

の言に合い、明は清濁の句を分つ
四大の性おのずから復す、子の其の母を得るがごとし、火は熱し、風は動揺、水は湿い地は堅固、眼は色、耳は音声、鼻は香、舌は鹹酢、しかも一一の法において、根によって葉分布す、本末すべからく宗に帰すべし、尊卑其の語を用ゆ
明中に当って暗あり、暗相をもって遇うことなかれ、暗中に当って明あり、明相をもって覩ることなかれ
明暗おのおの相対して、比するに前後の歩みのごと

し、万物おのずから功あり、当に用と処とを言うべし、事存すれば函蓋合し、理応ずれば箭鋒拄う

言を承てはすべからく宗を会すべし、みずから規矩を立することなかれ、触目道を会せずんば、足を運ぶもいずくんぞ路を知らん、歩をすすむれば近遠にあらず、迷て山河の固をへだつ、謹んで参玄の人にもうす、光陰虚しく度ることなかれ

宝鏡三昧

如是の法、仏祖密に附す、汝今これを得たり、宜しく能く保護すべし、銀盌に雪を盛り、明月に鷺を蔵す、類して斉からず、混ずるときんば処を知る、意言に在ざれば来機亦おもむく、動ずれば窠臼をなし、差ば顧佇に落つ、背触ともに非なり、大火聚の如し、但文彩に形せば、即ち染汚に属す、夜半正明、天暁不露、物のために則となる、用いて諸苦をぬく、有

為にあらずといえども、是語なきにあらず、宝鏡にのぞんで、形影相い覩るがごとし、汝これ渠にあらず、かれ正に是なんじ、世の嬰児の五相完具するが如し、不去不来、不起不住、婆婆和和、有句無句、ついに物を得ず、語いまだ正しからざるがゆえに、重離六爻、偏正回互、畳んで三となり、変じ尽きて五となる、荃艸の味のごとく、金剛の杵のごとし、正中妙挾、敲唱雙びあぐ、宗に通じ途に通ず、挾帯挾路、錯然なるときんば吉なり、犯忤すべからず、

天真にして妙なり、迷悟に属せず、因縁時節、寂然として照著す、細には無間に入り、大には方所を絶す、毫忽の差、律呂に応ぜず、今頓漸あり、宗趣を立するによって、宗趣わかる、即ち是れ規矩なり、宗通じ趣極るも、真常流注、外寂に内揺くは、繋げる駒、伏せる鼠（繋駒伏鼠）、先聖これを悲しんで、法の檀度となる、其の顛倒に随って緇をもって素となす、顛倒想滅すれば、冥心みずから許す、古轍に合わんと要せば、請う前古を観ぜよ、仏道を成ずる

になんなんとして、十劫樹を観ず、虎の欠たるがごとく、馬の髣の如し（虎の欠の如く馬の髣の如し）、下劣あるをもって、宝几珍御、驚異あるをもって、狸奴白牯、羿は巧力をもって、射て百歩に中つ、箭鋒あい値う、巧力なんぞ預らん、木人まさに歌い、石女たって舞う、情識の到にあらず、むしろ思慮を容んや、臣は君に奉し、子は父に順ず、順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔にあらず。潜行密用は、愚のごとく魯のごとし、只能く相続するを、主中の

主(しゅ)と名(なづ)く。

修証義

第一章　総序

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし。人身得ること難し、仏法値うこと希れなり、今我等宿善

の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇い難き仏法に値い奉れり、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いずくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟観ずる所に往事の再び逢うべからざる多し、無常忽ちに到るときは国王大臣親暱従

僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣くのみなり、己れに随い行くは只是れ善悪業等のみなり。今の世に因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず、善悪を弁まえざる邪見の党侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造悪の者は堕ち修善の者は陞る、豪釐も忒わざるなり、若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸仏の出世あるべからず、祖師の西来あるべからず。善悪の報に三時あり、一者順現報受、二者順次

生受、三者順後次受、これを三時という、仏祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を効い験らむるなり、爾あらざれば多く錯りて邪見に堕つるなり、但邪見に堕つるのみに非ず、悪道に堕ちて長時の苦を受く。当に知るべし今生の我身二つ無し、三つ無し、徒らに邪見に堕ちて虚く悪業を感得せん、惜からざらめや、悪を造りながら悪に非ずと思い、悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて悪の報を感得せざるに

は非ず。

第二章　懺悔滅罪

仏祖憐みの余り広大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を証入せしめんが為なり、人天誰か入らざらん、彼の三時の悪業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを転じて軽受せしむ、又滅罪清浄ならしむるなり。然あれば誠心を専らにして前仏に懺悔すべし、

恁麼するとき前仏懺悔の功徳力我を拯いて清浄ならしむ、此功徳能く無礙の浄信精進を生長せしむるなり、浄信一現するとき、自佗同く転ぜらるるなり、其利益普ねく情非情に蒙ぶらしむ。其大旨は、願わくは我れ設い過去の悪業多く重なりて障道の因縁ありとも、仏道に因りて得道せりし諸仏諸祖我れを愍みて業累を解脱せしめ、学道障り無からしめ、其功徳法門普ねく無尽法界に充満弥綸せらん、哀みを我に分布すべし、仏

祖の往昔は吾等なり、吾等が当来は仏祖ならん。我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋痴、従身口意之所生、一切我今皆懺悔、是の如く懺悔すれば必ず仏祖の冥助あるなり、心念身儀発露白仏すべし、発露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

第三章　受戒入位

次には深く仏法僧の三宝を敬い奉るべし、生を易え身を易えても三宝を供養し敬い奉らんことを願う

べし、西天東土仏祖正伝する所は恭敬仏法僧なり。若し薄福少徳の衆生は三宝の名字猶お聞き奉らざるなり、何に況や帰依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に帰依し、或は外道の制多に帰依すること勿れ、彼は其帰依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く仏法僧の三宝に帰依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし。其帰依三宝とは正に浄心を専らにして或は如来現在世にもあれ、或は如来滅後にもあれ、合掌し低頭

して口に唱えて云く、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、仏は是れ大師なるが故に帰依す、法は良薬なるが故に帰依す。僧は勝友なるが故に帰依す、仏弟子となること必ず三帰に依る、何れの戒を受くるも必ず三帰を受けて其後諸戒を受くるなり、然あれば即ち三帰に依りて得戒あるなり。此帰依仏法僧の功徳、必ず感応道交するとき成就するなり、設い天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感応道交すれば必ず帰依し奉るなり、已に帰依し奉るが如

きは生生世世在在処処に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三帰の功徳其れ最尊最上甚深不可思議なりということ、世尊已に証明しましまします、衆生当に信受すべし。

次には応に三聚浄戒を受け奉るべし、第一摂律儀戒、第二摂善法戒、第三摂衆生戒なり、

次には応に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偸盗戒、第三不邪婬戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不説過戒、第

七不自讃毀佗戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三宝戒なり、上来三帰三聚浄戒、十重禁戒、是れ諸仏の受持したまう所なり。受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壊の仏果を証するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の為に示しましまます、衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る、位大覚に同うし已る、真に是れ諸仏の子なりと。諸仏の常に此中に住持たる、各各の方面に知覚を遺

さず、群生の長えに此中に使用する、各各の知覚に方面露れず、是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆仏事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の仏化に冥資せられて親き悟を顕わす、是を無為の功徳とす、是を無作の功徳とす、是れ発菩提心なり。

第四章　発願利生

菩提心を発すというは、已れ未だ度らざる前に一

切衆生を度さんと発願し営むなり、設い在家にもあれ、設い出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありというとも楽にありというとも、早く自未得度先度佗の心を発すべし。其形陋しというとも、此心を発せば、已に一切衆生の導師なり、設い七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ仏道極妙の法則なり。若し菩提心を発して後、六趣四生に輪転すと雖も、

其輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば従来の光陰は設い空しく過ごすというとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて発願すべし、設い仏に成るべき功徳熟して円満すべしというとも、尚お廻らして衆生の成仏得道に回向するなり、或は無量劫行いて衆生を先に度して自からは終に仏に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。衆生を利益すというは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩

埵の行願なり、其布施というは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障えざる道理あり、其物の軽きを嫌わず、其功の実なるべきなり、然あれば即ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種となる、一銭一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自からが力を頒つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。

愛語というは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を発し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐いを貯えて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を楽しくす、面わずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを学すべきなり。利行というは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻ら

すなり、窮亀を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯単えに利行に催おさるるなり、愚人謂わくは利佗を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普く自佗を利するなり。同事というは不違なり、自にも不違なり、佗にも不違なり、譬えば人間の如来は人間に同ぜるが如し、佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし、自佗は時に随うて無窮なり、海の水を辞せざるは同

事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。大凡菩提心の行願には是の如くの道理静かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、済度摂受に一切衆生皆化を被ぶらん功徳を礼拝恭敬すべし。

第五章　行持報恩

此発菩提心、多くは南閻浮の人身に発心すべきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆国土し来れり、見釈迦牟尼仏を喜ばざらんや。

静かに憶うべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の為に抛捨せんことを願うとも値うべからず、正法に逢う今日の吾等を願うべし、見ずや、仏の言わく、無上菩提を演説する師に値わんには、種姓を観ずること莫れ、容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、行を考うること莫れ、但般若を尊重するが故に、日日三時に礼拝し、恭敬して、更に患悩の心を生ぜしむること莫れと。今の見仏聞法は仏祖面面の行持より来れる慈恩な

り、仏祖若し単伝せずば、奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況や正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尚お恩を忘れず三府の環能く報謝あり、窮亀尚お恩を忘れず、余不の印能く報謝あり、畜類尚お恩を報ず、人類争か恩を知らざらん。其報謝は余外の法は中るべからず、唯当に日日の行持、其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設い百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬うべし、我等が行持に依りて諸仏の行持

見成し、諸仏の大道通達するなり、然あれば即ち一日の行持是れ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏是れ即心是仏なり、過去現在未来の諸仏、共に仏と成る時は必ず釈迦牟尼仏と成るなり、是れ即心是仏なり、即心是仏というは誰というぞと審細に参究すべし、正に仏恩を報ずるにてあらん。

普回向

願わくは此の功徳を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜんことを。

十方三世一切仏　諸尊菩薩摩訶薩　摩訶般若波羅密

［略三宝］

在家略回向

仰ぎ冀くは三宝、俯して照鑑を垂れたまえ。上来○○経を諷誦す、集むる所の功徳は、当家家門先祖代々一切精霊、六親眷属七世の父母、三界の万霊等に回向し、報地を荘厳せんことを。

普勧坐禅儀

原ぬるに夫れ、道本円通、争か修証を仮らん、宗乗自在、何ぞ功夫を費さん。況んや全体逈かに塵埃を出ず、孰か払拭の手段を信ぜん。大都、当処を離れず、豈修行の脚頭を用うる者ならんや。然れども、毫釐も差あれば、天地懸に隔たり、違順纔かに起れば、紛然として心を失す。直饒、会に誇り、悟に豊かにして、瞥地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天

の志気を挙し、入頭の辺量に逍遥すと雖も、幾ど出身の活路を虧闕す。矧んや、彼の祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つべし、少林の心印を伝うる、面壁九歳の声名尚聞こゆ。古聖既に然り、今人盍ぞ弁ぜざる。所以に須らく言を尋ね語を逐うの解行を休すべし。須らく回光返照の退歩を学すべし。身心自然に脱落して、本来の面目現前せん。恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ。

夫れ参禅は静室宜しく、飲食節あり。諸縁を放捨し、

万事を休息して、善悪を思わず、是非を管すること莫れ。心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、作仏を図ること莫れ、豈坐臥に拘らんや。尋常、坐処には厚く坐物を敷き、上に蒲団を用う。或は結跏趺坐、或は半跏趺坐。謂く、結跏趺坐は、先ず右の足を以て左の股の上に安じ、左の足を右の股の上に安ず。半跏趺坐は、但だ左の足を以て右の股を圧すなり。寛く衣帯を繫けて、斉整ならしむべし。次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に

安じ、両の大拇指、面いて相拄う。乃ち正身端坐して、左に側ち右に傾き、前に躬り後に仰ぐことを得ざれ。耳と肩と対し、鼻と臍と対せしめんことを要す。舌上の腭に掛けて、唇歯相著け、目は須らく常に開くべし。鼻息微かに通じ、身相既に調えて、欠気一息し、左右揺振して、兀兀として坐定して、箇の不思量底を思量せよ。不思量底如何が思量せん。非思量。此れ乃ち坐禅の要術なり。

所謂坐禅は習禅には非ず。唯是れ安楽の法門なり、菩提を究尽するの修証なり。公案現成、羅籠未だ到らず。若し此の意を得ば、竜の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。当に知るべし、正法自ら現前し、昏散先ず撲落することを。若し坐より起たば、徐徐として身を動かし、安詳として起つべし、卒暴なるべからず。嘗て観る、超凡越聖、坐脱立亡も、此の力に一任することを。況んや復、指竿針鎚を拈ずるの転機、払拳棒喝を挙するの紹契も、未だ是れ

思量分別の能く解する所に非ず、豈神通修証の能く知る所とせんや。声色の外の威儀たるべし、那ぞ知見の前の軌則に非ざる者ならんや。

然れば即ち、上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶこと莫れ。専一に功夫せば、正に是れ弁道なり。修証自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なる者なり。凡そ夫れ、自界他方、西天東地、等しく仏印を持し、一ら宗風を擅にす。唯打坐を務めて、兀地に礙えらる。万別千差と謂うと雖も、祇管に参禅弁道すべし。何

ぞ自家の坐牀を抛却して、謾りに他国の塵境に去来せん。若し一歩を錯れば、当面に蹉過す。既に人身の機要を得たり、虚く光陰を度ること莫れ。仏道の要機を保任す、誰か浪りに石火を楽まん。加以、形質は草露の如く、運命は電光に似たり。倏忽として便ち空じ、須臾に即ち失す。冀くは其れ参学の高流、久しく模象に習って、真竜を怪しむこと勿れ。直指端的の道に精進し、絶学無為の人を尊貴し、仏仏の菩提に合沓し、祖祖の三昧を嫡嗣せよ。久しく

恁麼(いんも)なることを為(な)さば、須(すべか)らく是(こ)れ恁麼(いんも)なるべし。
宝蔵自(ほうぞうおのずか)ら開(ひら)けて受用如意(じゅようにょい)ならん。

食事の偈

五観の偈

一には功の多少を計り彼の来処を量る。
二には己が徳行の全欠を忖って供に応ず。
三には心を防ぎ過を離るることは貪等を宗とす。
四には正に良薬をこととするは形枯を療ぜんが為なり。
五には成道の為の故に今此の食を受く。

略飯台偈

●食前の偈

若飯食時（にゃくぼんじきじ）　当願衆生（とうがんしゅじょう）
禅悦為食（ぜんねついじき）　法喜充満（ほうきじゅうまん）

●食後の偈

飯食已訖（ぼんじきいこつ）　当願衆生（とうがんしゅじょう）
徳行充盈（とくぎょうじゅよう）　成十種力（じょうじっしゅりき）

平成二十三年八月発行

北海道標津郡中標津町西九条南一丁目三番地

○　○　寺

印刷　雨宮印刷株式会社

北海道標津郡中標津町西九条南一丁目三番地

電　話（〇一五三）七二―一二三五番